



カブトムシの旅

作成: 畑田慶子



森の大きなカシの木の
下に、タケルという名
のカブトムシが住んで
いました。タケルは、
いつだって遠い場所の
夢を見ていました。

「いつか、この森のず
っと向こうにある、あ
の光る山に行ってみた
いんだ。」





タケルがいつも見つめていたのは、森の切れ目からわずかに見える、夜になるとキラキラ光る、小さな山のようなものでした。それは、この森で一番遠い場所でした。「よし、決めた！ 今日こそ、あの山へ旅に出よう！」





「光る山？それは楽しそうだね！」タケルの親友、小さなテントウムシのアカリが、タケルの角の先にちょこんととまりました。アカリは賢くて、旅の計画を立てるのが得意でした。「でも、準備は大丈夫？地図は？お弁当は？」





タケルとアカリは、旅の準備を始めました。タケルは甘い樹液をたっぷり吸い、アカリは小さな露を集めた葉っぱの「水筒」を用意しました。そして、太陽が一番高くなった頃、二人は大きなカシの木の根元を出発しました。





まず、小さなせせらぎ
が立ちはだかりまし
た。タケルには大水の
海のように見えます。

「これは困ったぞ」タ
ケルが立ち止まると、
アカリが言いました。

「心配ないわ、タケ
ル！見て、いいものを
見つけたわ！」





アカリのアイデアで、二人は大きな落ち葉をボートにしました。風が吹くと、葉っぱの船はゆらゆらと揺れながら、無事にせせらぎを渡ることができました。「ありがとう、アカリ！君は最高の旅の仲間だ！」





たくさん歩いて、ついに夜になりました。タケルとアカリは、遠くから光る山をはっきり見ることができました。それは森の中で、ひととき明るく輝いていました。「ついに着くぞ！」タケルの胸はドキドキしました。





光る山にたどり着いた二人が見たものは...、予想していた山ではなく、夜の湿った地面に生える、大きなキノコの群れでした。青白く光るキノコたち。それが「光る山」の正体でした。タケルはがっくりと肩を落としました。





タケルは顔を上げ、周りを見回しました。ホタルたちの光と、キノコの光。それは、山とは違う、静かで美しい景色でした。二人は、たくさんの素敵な思い出と、次の旅への夢を心に秘めて、カシの木への帰り道を歩き出しました。

